第８回（平成２８年度）「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式
「京都環境文化学術フォーラム」国際シンポジウム開催概要

１　日時

平成２９年２月１１日（祝・土）

■「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式　午後１時～２時１５分

■「京都環境文化学術フォーラム」国際シンポジウム　午後２時３０分～５時

２　場所

国立京都国際会館　メインホール

３　内容

（１）「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式

オギュスタン・ベルク 氏（フランス国立社会科学高等研究院 教授）、ホセ・アルベルト・ムヒカ・コルダノ 氏（前ウルグアイ大統領）、中村 哲 氏（医師、ペシャワール会 現地代表、PMS（ピース・ジャパン・メディカル・サービス） 総院長）を第８回殿堂入り者として顕彰し、認定証及び記念品を授与しました。殿堂入り者からは記念スピーチを頂きました（ムヒカ氏はビデオメッセージ）。

会長式辞

認定証の授与（ベルク氏）

記念スピーチ（中村氏）

ビデオメッセージ（ムヒカ氏）

（２）国際シンポジウム

『水土・風土・国土～大地に根ざし、人とつながり、未来をひらく～』をテーマにシンポジウムを開催しました

ア　記念講演

【オギュスタン・ベルク 氏】

ベルク氏はどのような経緯で「風土」の研究をし、いかにして通態的風土論を考えるに至ったのか等、京都にゆかりのある人物４名（和辻哲郎、西田幾多郎、今西錦司、山内得立）を紹介し、講演されました。

【中村 哲 氏】

アフガニスタンでの水源確保事業を通して、「お金で何でも解決できるという錯覚を捨てなければいけない」、「消費・生産を無限に繰り返さなければ成り立たない世界はあり得ない」と訴えました。

イ　パネルディスカッション

〔パネリスト〕
オギュスタン・ベルク 氏（殿堂入り者）
中村 哲 氏（殿堂入り者）
眞鍋 かをり 氏（タレント）
山極 壽一 氏（京都大学 総長）
〔コーディネーター〕
枝廣 淳子 氏（東京都市大学教授、幸せ経済社会研究所所長）

枝廣：昨今、3 年続けて地球の平均気温が史上最高を記録しています。そして、地球上の海氷面積が激減し、世界的に温暖化をめぐる様々な影響があちこちで見られるようになってきています。

20 年前に、この京都で京都議定書ができ、そして、温暖化を何とか止めようと世界中が様々な努力をしてきました。2007 年に、アル・ゴアさんの『不都合な真実』も世界的に温暖化を何とかしようという機運を高めました。そして、京都からパリへということで、パリ協定が結ばれて、そういった意味では地球全体で何とかしなければいけないという機運は高まりつつあります。

一方、イギリスやアメリカでは、自分たちの国だけを優先するような政策も出てきており、温暖化対

策に関していろいろ心配な面もあります。そんな状況の中で今回のシンポジウムのテーマである、どうやって未来につなげていけばよいのか、そういう話をしていきたいと思います。

眞鍋：殿堂入り者お二人の話を聞き、豊かな環境からは豊かな文化や風土も生まれるけれど、厳しい環境の中では命をつなぐことも難しかったりする、でも、厳しい環境でも、中村さんのお話にあったように、環境や風土を理解すれば、人の手によって豊かな風土を作っていくことも可能であるということを知り、すごく驚きました。また、風土という言葉は何気なく使っていたのですが、ベルクさんのお話を伺い、言葉の持つ概念、意味もちゃんと理解できたような気がします。

私はチーズが大好きなので、チーズプロフェッショナルという、ワインで言うソムリエのような資格を 2010 年に取りました。フランスではチーズは風土そのものといわれ、「un village, un fromage. (一つの村に一つのチーズがある)」という言葉があるように、フランスのチーズの考え方で私が大好きなのは、その土地にいる牛や山羊、羊などのミルクを自然のサイクルに合わせて絞って、それを使って、その土地の菌や気候を利用して作って熟成させていく、それを保存食として人々が食べて、それが食文化になっていくということです。物によっては何千年も前から変わっていないものもあり、そういったところも好きです。また、食文化になるだけではなく、例えばカマンベールチーズだったら、もともとパリ近郊で食べられていたブリーという白カビチーズがあるのですが、フランス革命をきっかけにノルマンディーの方に逃げた人たちが伝えて、そこで根付いてカマンベールチーズになったという歴史も勉強し、一つのチーズが、その風土によって、ストーリーになっているところ、食べるとそれを頭の中で想像できるところが、チーズの一番の魅力だと思い、はまってしまいました。

チーズの話を仕事ですると、「日本の食品に例えると何ですか」とよく言われるのですが、考えてみると、あまり当てはまるものがないんです。日本も発酵食品はたくさんあります。お味噌、お醤油、お酒といった、風土を利用した、風土に根付いた食品がたくさんあるのですが、現在、当たり前のものとして利用し、工場製のものが多いというのももちろんあるのですが、風土に根付いた食品であるという認識が私たちの中で薄くなってきていることをすごく感じています。

風土に根付いたものの大切さ、それを理解することの大切さ、その中で生きることの術を、近代化してしまった感覚、考え方がはびこっている中で、これからを生きる人たちはもう一度考えて、見直していかなければいけないのではないかということを、お二人の話を伺って強く感じました。

山極：私はゴリラの研究をしていて、ゴリラにとって自然はどう見えているのだろう、どう感じられているのだろうということを常に気にしながら調査していました。人間とゴリラの違いは、簡単に言ってしまうと、人間は絵を描くように自然を勝手に境界付けることです。ここが森である、ここが川であると線を引いて理解しようとします。よって、どんどん自分でコントロールできるものだと錯覚してしまいます。その根源が現代の文明社会だと思います。だけど、ゴリラの身になってみれば、そんな線なんか引けるわけがないのです。それは連続していて、身体でそれをずっと感じ続け、乗り越えていくものなのです。全てが総体であって、要素に分けられるものではない。そういうことを今西さんは言いたかったのだと思います。それを恐らく西田幾多郎も和辻哲郎も、風土や無の思想の中で言っているのではないかと思います。それを今、我々は忘れはじめています。私が最近思うのは、衣食住を通じて人間は自然と関係を持ってきた。その衣食住というのは、常に何かものを作ることだったわけです。農業にしても、狩猟採集にしても、工業にしてもそうです。しかし、自然というのは、そこに厳然として我々を包み込むものとして、包摂するものとしてあったわけです。それが今どんどん傷んできています。そして、その傷んでいることがあまりにも重大な出来事になっているので、人間も傷みはじめているのです。ただ、それは我々自身が人間同士で共感し合いながら、それを重大事とみなしていかなくてはならないわけです。初めに私が申し上げたように、自然に線を引くことが常識になってしまった我々は、他の地域の自然と向き合っている人たちのことが分からなくなっているのです。

お二人に質問したいのですが、ベルクさんは、4 人の方を挙げられましたが、言葉を通じて日本の風土というものを実感できるようになった。そこを乗り越えられたものは一体何だったのだろうか。それは言葉だけではなかったはずです。それをお聞きしたいです。

中村さんにも同じことをお聞きしたいのですが、人間にとって歴史や文化というのは身に染みついて

しまっているものだと思うのです。それを乗り越えて、地元の人たちの、あるいは地元の自然と言ってもいいのですが、その重要さ、その本質に迫ることができたのは一体どういう実践を通じてなのでしょうか。我々は世界で様々な自然で生きている人たちと手を組まなければいけなくなっているわけです。これはムヒカさんが先程ビデオメッセージで言ったことです。そのために一体何をしたらいいのだろう。どうしたら文化の壁を乗り越えることができるのだろうということを、難しい質問かもしれませんが、お聞きしたいと思います。

ベルク：風土という言葉には二つの意味があります。一つは、眞鍋さんのコメントに、「un village, un fromage.」という表現があったように、限られた地域の特殊性という意味です。そこの産品などの物を表現する概念になります。一般的には、風土はそのように理解されているのではないかと思います。けれども、哲学者、和辻哲郎が『風土』という本の最初の１行目に出した風土性の定義はもっと深い意味、もっと普遍的な意味です。普遍と言えば、やはりそれは地域性を超えた次元、我々の存在の構造の契機です。

同時に、今の近代文明の結果としては、前者の意味での風土性がなくなりました。三浦 展（みうら あつし）という社会学者が、10 年前に『ファスト風土化する日本』という、日本は画一化していくと批判した本を出しました。どうしてそのように画一化しているかというと、我々の人間としての存在の構造そのものが変わってきたのではないかと思います。変わってきたということは、和辻哲郎の言葉を借りると、具体的な基盤という風土性をなくしているのではないかということです。これは直接今の環境問題に関わります。

山極：最初に中村さんがアフガンはイスラムの世界だとおっしゃいました。宗教的な意味でも日本とは随分遠い世界かもしれません。彼らが自然を理解し、自然の中で生きていくためにも宗教というのは必要だったわけです。でも、中村さん自身はイスラム教徒ではないでしょうし、日本で育ったご経験をお持ちです。その中で、アフガンの中で人々が生きる上で本当に重要なものはまさに環境と一体化した、あるイマジネーションだと思うのですが、そういったことを理解するようになったのは、普通の人はなかなか理解できないと思うのですけれど、その一番のポイントは何かをお聞きしたいです。

中村：自分の生涯の中で一番インパクトがあったのは昆虫採集です。自然と接することですね。何かの虫を見る時、「いる」という目で見ないと、存在が分からない。見ようとするものしか見えないというのが基本的な自然に対する認識です。先ほどから話題になっている風土論というのは、それが共有された世界なのです。

ベルクさんは、フランスのこと、日本のことがあって、その違いが初めて分かってくる。そこでいろいろな評価なり理解が生まれてくるという意味では、私にとってその違いを結び付けるものは、昆虫の世界を通して見た生物の共通性が一つありました。

それから、私はもともとキリスト教徒です。その前は儒教徒です。最後の論語教育を受けた人間だと思います。そういうことで、日本社会ともギャップを感じながら生きてきた人間です。現地に行くと、ギャップもありますが、共通のものも感じるということで、これは違った世界を複数見られるものの一つの特権ではないかと思っています。総長も、ゴリラの世界と人間の世界とを比べて見ている二つの世界が一つ大きな点ではなかろうかと自分では思います。

先ほどの話の絡みで言うと、擬似共通性、それが近代化です。人間というのは同じものだ、同じ幸せを持ち、同じパターンで生活してこそ幸せになれるのだといった誤解がはびこっていく背景には、一つの社会しか知らない、一つの社会の中で利を得る人たちだけの意見がまかり通っていることがあります。全てを商品化し、無限に生産と消費を繰り返さないと生き延びられないような体制が続く限りは、こういった誤解は絶えないのだと思います。しかし、それは反自然的なものですから、やがては絶えるでしょう。

枝廣：持続可能性の課題を考えるときに、必ずキーワードとして出てくる「自然」という言葉を少し掘り下げて考えていきたいと思います。

自然という言葉に対する反意語は、辞書を引くと、人工、人為といった、人の手が加わったもの、人の意思が反映されたものという意味の言葉がよく出てきます。アメリカの人たちと話をしていて、自然のイメージを聞くと、例えばアンセル・アダムスという写真家が撮ったヨセミテ国立公園、人が一人もいない、本当に自然界だけの写真、あれが自然だと言う人たちがたくさんいるのです。一方で、日本の

私たちは東洋的な考え方かも分かりませんが、自然といったときに、必ずしも人間と対峙する、人間に対比されるものでもないと考えます。「nature」という言葉が明治以降、日本に入ってきたときに「自然」という訳語ができたのですが、それまで人間を除いた自然界だけを表すような日本語は実はなかったのではないかという考え方もあります。例えば、私たちは相手のことを「あなた」と言います。「あなた」という日本語も元来は「あちらの方（ほう）」という意味で、人間をそれこそくっきり境界を引いて取り出すことはあまりなかったのではないかと思います。

新幹線に乗っていて、富士山が見える。それを英語で普通に言うと、「I see Mount Fuji.（私は富士山を見ている）」になります。このときには見ている私と見られている富士山という主体と客体がはっきりと区別されています。でも、私たちが「富士山が見える」と言うときは、別に私が見ているという意識ではなく、富士山がある風景が先にあって、それを見ている私、隣の席の人も見ているみたいな、そういう世界です。そのときに自分と自然、人間と自然を切り離してきたのではないかと思います。人間と自然との関係は、先ほど中村さんのお話にも何度か出てきたキーワードですが、その関係性をどう考えるかというのがとても大事ではないかと思っています。

ベルクさん、中村さん、山極さん、どのように人間と自然を対比して、もしくは一緒に見ることができるのか。もしかしたら歴史的に変わってきたのか。日本とフランスでは、もしくはヨーロッパでは考え方が違うのか。眞鍋さんは旅の番組もされているということなので、そのあたりで何かちょっと違う人間と自然との関係性を感じられたことがあるかどうか。そのあたりをお聞きしたいと思います。

山極：自然と人工物の違いは、自然は例えば何かの生物なり、種がいなくなってしまったら、他の生物が入り込んできます。これを「ニッチが空いた」と言います。いろいろな生物との関係は新しく更新されるけれども、全体としての多様性はそんなに簡単になくなるわけではない。だけど、人間が出てきてから、どんどん生物が絶滅しています。それを置き換えるという現象は起こっていないのです。人間の人工物は単純化です。どんどん生物の多様性が失われていっています。特に中村さんが仕事をしているところは大干ばつで、かなりの生物が死に絶え、一様な風景が広がってしまいました。そこに欠落したものが何だったのか、もはや我々は詳細には分からないわけです。つまり、今あるものは見えるけれども、失ったものは見えないというのが今の人間の見識であり、現状なのです。それを何で埋めていくのか。人間は人工物で埋めていこうとして、それを改善と称しているのだけれども、果たしてそれでいいのかということです。そこが今の環境問題の非常に重要な点だと思うのです。

先ほどの風土という問題に立ち返ってみるならば、我々の身体はそれを歴史的に受け継いできました。しかし、それが今受け継がれなくなっているということが重要なのではないかと私は思います。富士山を見て感動するというのは、ただ富士山があるわけではなくて、富士山という景色があるわけです。それに感動する心を日本人は持っているのです。それは歴史的に受け継がれてきたものであると同時に、自然と感応し合える感性を日本人が持っているからなのだと思います。それが恐らく未来の世代に受け継がれなくなっているかもしれないということだと思います。

ベルク：「nature（自然）」という言葉は、歴史のある概念です。東洋に現れたのは恐らく紀元前6世紀ごろです。西洋でも大体同じころに、ギリシャ語のフィシスという概念が現れたのです。中国語で言うと、それは天（tiān）または自然（zìrán）です。どちらかというと天（tiān）は儒学の方、自然（zìrán）は道学の方です。その前には、動物など具体的なものはあったけれど、それを総合的に捉えるような概念としては初めて出たわけです。

ヨーロッパ風の理解と東洋風の理解の間の一番大きな違いは、自然の「自」、自分の「自」にあるのではないかと思います。ヨーロッパ風の近代の自然観が現れたのは最近のことで、近代そのものです。つまり、17世紀ごろに環境が客体化され、人間論がはっきり出て、自分の存在と違う存在として定律したわけです。逆に東洋では、大和言葉で言うと「おのずからしかり」です。その「おのず」の中には環境も含まれていて、自分の存在も含まれている。だから混同されやすいのです。

どうして自然を愛していた国、日本が高度成長時代に世界一の自然破壊国になり得たかという問題を考えると、いろいろ要因はあるけれども、その一つは自然という概念そのものなのです。自然の中に「自」が入っているから、わがままにやっても、結局、自然だと。自然と当然とは同義語だったのです。だから、資本主義の国土の捉え方、田中角栄さんの『日本列島改造論』において決まった、資本主義のわがままな日本列島の捉え方には、結局、自然保護という面も含まれていました。例えば、志布志湾に計画されていたスーパーコンビナートの紹介では、自然保護の価値を人に分からせる、理解させるには自然は大事だと書かれていました。同時に自然を破壊する計画をしていたわけです。「おのずからしかり」

で混同されていました。ですから、それを超えなければならないと同時に、人間論ということではなくて、自分の責任を感じながら、自然を大事にしなければならない段階になっていると思います。

枝廣：中村さんの『天、共に在り』という本の最後にこんなふうに書いてあります。「やがて、自然から遊離するバベルの塔は倒れる。人も自然の一部である。科学や経済、医学や農業、あらゆる人の営みが、自然と人、人と人の和解を探る以外、我々が生き延びる道はないであろう」。そうやって、自然と人間が分かれてしまっている、自然が客体化する、自然を手段化する、自分たちがそこにいないかのように取り扱えるものとしてやってきたことが、今いろいろな問題を起こしてしまっていると思うのです。実際にアフガニスタンの現場で人々と自然に関わっていて、自然と人間の関係性の問題意識、もしくはアフガンから見る日本人の関係性でもいいですが、どんなふうに思われているでしょう。

中村：ベルクさんが細かく定義してくれたことと大体同じだと思います。自分は医者なので、医者の立場から言うと、自然というのは単に山川草木、自分の外にあるあれではなくて、我々の体の内部の非常に複雑な代謝も司っているのです。我々自身が自然の一部であると、それも含めて考えなければいけません。

バベルの塔は、技術がどんどん進んで、人間が神様より偉くなったような錯覚に陥り、奢った人間が罰を受けるという物語です。今はバ【ベ】ルの塔をバ【ブ】ルの塔と言い換えてもいいでしょう。そこで神がどういう罰を与えたか。ある日突然、人間同士のコミュニケーションができなくなったのです。言葉が乱れて、ばらばらになってしまった、そして、みんなが散っていったという物語です。まさに今はバブルの塔の時代だと思います。

自然を自分たちが儲ける対象にして、それをネタにして自分たちの地位を上げるだけでなく、人間が神よりも、自然よりも高みにあるような錯覚をつくり出していく過程、これが恐らく近代化だと思うのです。ということは、それなりの罰を受けるのではないかと思います。単に外の自然が破壊されて、食べ物が足りなくなるというだけではなく、人間の内部にある自然、いろいろな代謝機能や脳細胞の働きさえも破壊されていくのではないか。最近のアメリカ大統領の発言なんかを見ていると、どうもその時期が近づいてきたのではないかという気がするのです。何でもかんでも売れるものにする、経済成長しないと、何でも成長しない、良くならないという錯覚がもう終末段階に来ているのではないか。これは人間の内部を、私たちの体も蝕んでいきます。いろいろな意味で、外的自然、内的自然と向き合って我々が生きていく時代が既に来ているのだと思います。

医学の立場から言っても、この間日本でインフルエンザがはやって、タミフルという薬の世界の4割以上が日本に集まり、その順序をめぐって日本中が大騒ぎした。これは終末的な気がしました。口蹄疫がはやったからといって、病気にかかった牛を、いくら家畜とはいえ、何万頭も屠殺してしまう。こんなことが許されるのか。あれは医学的に言うと、ただの流行病なのです。確かに、はやると子牛の死亡率は高くなりますが、かかった牛はそれ以上病気にならないという一種の自然免疫製造過程なのです。それまで否定してしまうという、行き過ぎた局面を見ると、相当これはいかれてきたなと思っています。それなりの考え方、哲学を持っていないと、私たち自身もその狂気に巻き込まれていくという気がしています。

眞鍋：私が自然の本来の生き物としての人間というものに興味が出たのが、一昨年出産してからで、あらためてそういうことを考えるようになりました。実際に子どもを育ててみると、初めての子育てだからというのもあるのですが、本当に大変で、私は何でただ一人育てるだけでこんなに大変なのだろうと、疑問がだんだん膨らんでいき、そもそも人間はどういうふうに子育てしてきた生き物なのだろうというところに興味が行き着いて、自分なりにいろいろ調べてみました。すると、太古の昔は、人間は集団で子育てをして、群れでどんどん子孫を増やしていく生き物で、今の核家族で子育てをするということ自体が人間の子育てとして無理のある状態であるということを知り、「じゃあ、大変に決まっているよね」というところで腑に落ちたことがありました。

また、マタニティブルーが起こるのは、集団の中で子育てするために、子育て中に孤独な状態に置かれてしまうと、脳が不安になる物質を出すように作られているからだということを学んで、この現代を生きる中で、今から集団子育てに戻ることはできないけれど、もともと自然の中で人間はどうだったかということを知るということが一つヒントになるし、それは大きなメリットだなということは感じました。

しかし、人工の物にあふれている世界において、自然なものはいいことのように感じてしまうのです

が、果たして本当にそうなのかということも感じています。自然の中にも、残酷な面があります。例えば、虐待のニュースは「なぜそんなひどいことができるのだろう」と思うけれども、自然界に目を向けると、生き物の習性としてそういうことが起こるという現実もあり、必ずしも自然なことは人間にとって優しいこと、素晴らしいことだけではないということもすごく感じています。
　山極さんにお聞きしたいのですが、自然の中にある残酷さみたいなものを私たちはどういうふうに受け止めればいいのか。自然に回帰しようとして、そういった部分を見てしまったときに、そこも含めて受け入れなければいけないのか。どういうふうに受け止めればいいのかを聞いてみたいです。

山極：確かに自然から学ぶことだけではなくて、自然の中にいると、自分が人間であるという気がとてもするのです。私はゴリラを一緒に地元の人たちと、地元にもたくさんの民族の方々がいるのですが、見ていると、国を超えて、「おれたちは人間だよな」という気になります。それは何かということなのです。我々は自然の中にいると人間というものを強く感じて、その中で生きていることを当たり前のことのように受け取れるようになる。その自然の見方の中でただただ自然に迎合していくのではなく、人間としての礼節を知るということになるのだと思います。特に、共に生きるということが重要なのだと思うのです。
　私は中村さんを特集した、運河を作る番組の中で、農民の人たちが緑の畑を持ったときの、「みんなで一緒に仕事をして食料を作ることがとても楽しい」という歓喜の嵐にすごく感動した覚えがあります。我々は衣食が足りればいいわけではない。それを一緒に作っていくのです。眞鍋さんも一緒に子育てをすることがとても大事だとおっしゃいましたが、共に生きる時間をつくるということが人間たり得ることであって、そこで人間であれば、当然のことながら、他の動物とは違う礼節をそこで感じ、実行することになるのだと思うのです。そういった抑制力を身に付けていけるものだと思うのです。そのような礼節というのは、世界中のどこの場所にいても、動物とは違うものだと思います。そういうことが今できなくなっているというのが問題なのではないかと思います。個人がばらばらになって地域と引き離されてしまっていて、人間が自然からも、人間からも孤立化しているのが現状です。人間同士が自然の中で共に生きるという時間をつくることが、とりわけ重要なような気がします。

枝廣：このパネルディスカッションのテーマ「大地に根ざし、人とつながり、未来をひらく」の「大地に根ざし」というところで、一人一人が地域、コミュニティ、もしくは大地から切り離されてしまっている。特に都市に住んでいると、そういう生活になりがちです。中村さんと山極さんから、ぜひそのあたりのお話をしていただいて、私たちが大地に根ざすとはどういうことなのか、そうなっていない現実がどんな問題を生み出しているのか、もう少し考えを広げたいと思います。

中村：アフガニスタンの飢饉がなぜ問題にならないかというと、たとえ良心的なジャーナリストがアフガニスタンに行っても、「私はアフガン人です」と言う人は都市から出てきた人で、田舎に行くと英語も通じませんし、文化が違うので、全然話がかみ合わないのです。取材がまずできない。メンタリティが自分たちに似ている都市部の人たちから話を聞かざるを得ないという悲劇があるのです。つまり、同じアフガン人でありながら、「水？毎日出ているよ。時々断水があるよ」と答えます。700 万人以上の人が飢餓線上で苦しんでいるなんて誰も思っていないのです。彼らの日常生活では、スーパーマーケットに行けば、野菜もある、果物もある、何が飢饉なのだという感じなのです。ところが、農村に行くと何もないのです。本当に何も採れない。せめて水と狭い土地さえあれば、それぐらいは自分で作れるのだけど、それがないといった地域が、かなりたくさん広がりつつあるわけです。そこに、「近代的な生活というのはこうなのですよ。あなたたちのより良い生活のためには、こういったことが必要ですよ」と援助が入ってきます。それが全部悪いとは言いませんが、教育であれ、政治体制であれ、人権活動家の意見であれ、国連人権委員会の勧告であれ、全て都市化の方に向いているのです。即時に全世界がいっぺんにそうならなければいけないという考えのために、地方との軋轢を生んでいる気がします。
　地方に行くと、全く英語もしゃべれない。まともに教育を受けた人は 8 割に満たないという状態です。うちの職員でも読み書きできるのは 1～2 割です。私はこのギャップを広げてはいけないと思います。その地域に根ざして、たとえ我々が嫌に思う習慣、例えば女性の被り物、これはお国なので悪くは言いたくないですけれども、被り物までむしり取るような生活を押し付けてはいけないと思います。まずは時間をかけてそこを見るということと、私たちが向いている近代化そのものがなぜ自然と接触できなかったのか。それはコミュニティで言うと、農村と都市の極端な分離というのが少なくともアフガニスタンでは目立つからです。そこにどうやって入っていくかということが大きな問題になってくるのではな

いかと思っています。

山極：援助の問題で一番重要なのは、食料の供給によって一時的に人は救えるかもしれないけど、食料の供給は文化を破壊するということなのです。私も難民がどっと押し寄せた地域でずっと仕事をしてきましたが、難民の援助物資が地元に流通すると、それに慣れてしまって、地元で地道に食料を生産して、仲間同士で分配しようという文化が薄れていきます。援助物資が出回ると、まさに都市の文化があっという間に農村に広がります。これは大変問題だと思います。例えば、先ほど中村さんがアフガンで 80%は農民だとおっしゃいました。アメリカで農業に従事している人口は 2%なのです。だけど、世界中にアメリカで作られた農業製品が出回って、その一部は援助物資として世界に流通しているわけです。地元の土で、地元の種で作られた農業製品を味わいながら自活していくという文化がだんだんなくなっているのです。それはまさに人と大地のつながりを切ることになっていて、自立的な人と自然のつながりをだんだんと薄れさせてしまう。それが人の無意味な移動を呼び、そして、悪い経済が充満していきます。

今の資本主義は、もうけの大部分を次の生産に投資して、どんどん右肩上がりに生産力を高めていくという方向で進みますから、それが安定であるという発想なのです。でも、従来、安定とはそういうものではなく、現状の状態を維持することが安定だったのです。それがいつの間にかどんどん回転して、新しいこと、増収を増やしていくことが安定的だと考えられるようになってしまった。それができなければ、科学技術を応用して、それを支えていこうという時代です。これをどこかで止めなければいけません。結局、つくり出したものは 70 億人の世界人口と 15 億頭の牛と 4 億頭の犬です。自然界ではあまりドミナントな存在ではなかったものを地球上に充満させる結果になってしまい、それが逆に我々人類を苦しめているわけですから、どこかでそれを方向転換させないと、自然とのハーモニアスな暮らしは戻ってこないのではないかと思います。

枝廣：拡大再生産を続けることが安定で、前と同じでは安定しない、何とかいろいろなものをつぎ込んで、経済成長を続けないといけない、地球自体が大きくなるわけではないので、地球から何らかの資源・エネルギーを取り出して経済活動をして、要らないものを地球に戻しているわけなので、有限の地球の上で無限の経済成長はできないはずなのですが、いまだに短期的にはそれが必要だとして動いてしまっています。去年の殿堂入り者の一人であるハーマン・デイリーさんが、活発な経済活動は行われるけれど、経済の規模自体は大きくならない、「定常経済」に切り換えていかないといけないとおっしゃっていたことを思い出しました。

ベルクさん、「大地に根ざし」ということで、お二人のお話があり、それから拡大再生産の話まで広がりましたが、どんなふうに私たちはこの現状を考えていったらいいのでしょう。

ベルク：経済第一主義と、都市と農村の問題は地理学の昔からの問題ですが、その規模は国によってさまざまです。例えば、日本の場合は、高度成長以来、過密の問題があって、それが直ったかといえばそうではなく、逆にどんどん過疎が進んでいます。そして、国そのものの構造が変わりつつあります。自然の保護、環境の危機は、食料と関係しています。日本は同時に自給率が下がっています。日本は富国なので、経済市場でいつでも買えると思われていますが、いつまでも続くか分かりません。

一方、ラテンアメリカのペルーを見ると、植民地以来、国、空間の構造は完全に変わりました。昔は 7,000m までの高山と海までの数段階の生態学的なゾーンがありました。スペイン人が入る以前の伝統的な国土は、山から海へという垂直的な構造があったのです。その構造は、上から水をもらうような構造だったのですが、スペインの植民地になってから、海岸の方が豊かになり、上が忘れられて、残っている農民は大体土着の人たち、いわゆる土人です。海岸の方はスペイン系の人たちが優先です。こういう構造が 500 年の歴史においてどんどんつくられるようになりました。それはただの政治的な問題だけではなく、国の存在そのものに関わる問題です。山の方を忘れると、いろいろな生態学的な問題が起こります。例えば、段々畑が無くなると土砂崩れなどになります。それらの問題は 10～15 年前から再発見され、これから人間の空間の理解の仕方、生活の仕方が根本的に変わるかもしれません。

また、長い間、海岸が優先という構造になっていたけれど、国がばらばらにならないように 2005 年くらいに海岸からブラジルを結ぶ横断道路を造りました。離れていた地域をもう一度一緒にすることが目的でしたが、その道路を使って不法森林伐採が横行し、金の密貿易が行われるなど、悪い結果に繋がりました。元の構造に戻そうとしても、何も実らないということです。

枝廣：自然と人間との関係、都市と農村との関係、例えば日本で言うと、人口１万人以下の市町村の人口を集めても日本の 6%にしかなりません。小さな割合なので、あまり重視されていませんが、人口１万人の市町村の面積を合わせると日本の約半分になります。その面積を守ってくれている人たちのことを、都会に住む私たちがどのように我が事化していくのか、どのように関係性をつくっていくのか。いろいろな課題が出てきたと思います。

眞鍋：私たちがいいと思ってやっていることも、実は目先のことだけで、何も解決していないのだな、そういう仕組みになってしまっているのだなということも分かったのですが、根本的に何が必要かは、なかなか普通の生活をしていると分からないと思います。実際に殿堂入りしている皆さんのような方に何が必要か発信していただいて、今は発信したものが拡散しやすい世の中になっていて、デマも広がりやすいですけれど、真実も広がりやすいと思うので、これから正しい道筋がたどれるようになっていけばいいなと思います。

山極：人間としての礼節については、人間というのは弱い存在であって、弱い部分から強さを出してきたというところに人間の進化の方向性があったと思います。ゴリラに比べると、人間はずっと弱い存在です。ただ、弱さというのを逆転しながら、人間の共感力や協力をうまく使いながら、大きな自然、多様な自然の中で生き抜いてきたのがまさに人間らしさです。でも、それを構造物に変えて、人間は強いと思い込んでしまったというところに、この文明の大きな錯誤があったと思います。それをもう一度反省し直して、もっと地道に人間が分かり合い、協力し合い、コミュニティを大事にしながら生きていくという方針、つまり、経済ではなく、社会というものを中心に据えた暮らしづくりをしなければ、この文明は転換できないだろう、中村さんがおっしゃったように破滅に向かうだろうと思います。

ベルク：京都は先ほど申し上げた思想家がたくさん出た土地です。今西錦司さんのおっしゃった、自然科学ではなく自然学を理解できる土地は、やはり京都ではないかと思います。これからも、私は自然学を理解するために努力したいと思います。

中村：人間と他の動物との最も決定的な違いというのは、今西さんもおっしゃっているように、自分と自然環境を遮断して適応していくということです。他の動物の場合は、自然が完全にヘゲモニー（覇権）を握って選択していくわけです。人間の場合は、自然環境と自分、内的自然とを遮断します。例えば着物もそうです。寒ければ、着物を着て外界と遮断して適応してきました。これが人間の運命的な反自然的な点なのです。

　ただし、物事には程度があります。そのこと自体が人間を滅ぼさないようにしなければいけないという知恵をこれから出していくべきではないかと思います。要するに、敵も、味方も、自分の中にあるということです。よく我々は外の批判をします。例えばヘイトスピーチにしても、暴力や人を憎悪する芽は自分の中にあります。自分はあるときにはそれを抑え、外のものを批判するけれども、実はそれは人間に内在しているものだということを人間がもっと知るようになると、案外そういった知恵が生きてくるのではないかという気がしています。

　この世界の中でそんな考えでは生ぬるいという意見もあるでしょうけれど、私は、哲学、思想、宗教、新たにつくり上げたような宗教ではなく、昔から続いている伝統的な、その地域の中で脈々と息づいてきた考えの中にはそういう核があると思います。それを大事にして、単に「みんなが言うから、そうしよう」と流れていかないように、自制していく態度がこれからますます求められるのではなかろうかと思います。

枝廣：このパネルディスカッションが、皆さんお一人お一人が「大地に根ざし、人とつながり、未来をひらく」、その一助になればと願っています。